vol.17　ドリアンスケールの使い方について　～その 3～

では、vol.17、始めていきましょう。

今回は『ドリアン的なコード進行』についてです。

大元の考え方としては、リディアンの時と同じなので、vol.13 で出てきたポイントをもう一度確認しておきましょう。以下の様になっていましたね。

1、狙っているモード・スケールの、トニックがルートになっているコードをトニックコードとする。

2、そのモードの特性音を含むコードが、主にトニックへの解決を促すコードである。

3、そのモードの特性音を含むコードでも、他のモードや調性を示唆するコードは使い方に気を付ける。

4、構成が「Xm7(♭5)」になるコードは使用を避ける。

5、そのモードの特性音を含み、かつトニックコードに(音程的に)近いコードほど、トニックへの解決を促す。

6、モードの進行では、隣り合ったコードへの進行が推奨される。

これらをベースに、今度はドリアンの進行を作っていく、と言う事になります。

では、まず、一連のテキストで題材にしているのは「D ドリアン」なので、その大元である C キーのダイアトニックコードから見ていきましょう。

※C キーのダイアトニックコード

Ⅰ、CM7
Ⅱ、Dm7
Ⅲ、Em7
Ⅳ、FM7
Ⅴ、G7
Ⅵ、Am7
Ⅶ、Bm7(♭5)

で、これらのコードを D ドリアンの観点から並び替えると以下の様になりますね。

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

※C キーのダイアトニックコードを D ドリアンの観点で見る

Ⅰ、Dm7
Ⅱ、Em7
♭Ⅲ、FM7
Ⅳ、G7
Ⅴ、Am7
Ⅵ、Bm7(♭5)
♭Ⅶ、CM7

こうして、Dm7 をトニックコードとして扱います。(※先ほど挙げたポイントの 1)

次に、ポイントの 2 である、「そのモードの特性音を含むコード」を割り出してみましょう。

D ドリアンは、

D(tonic)、E(M2nd)、F(m3rd)、G(P4th)、A(P5th)、B(M6th or ♮6th)、C(m7th)

となっていて、特性音は M6th の B 音ですね。

先ほどのコード群の内、この音を含むコードは、Em7、G7、Bm7(♭5)、CM7 の 4 つ。

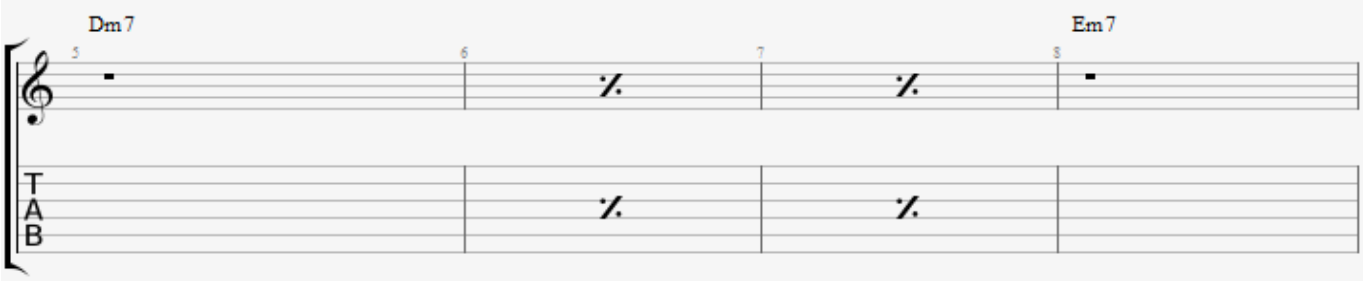
で、この 4 つを、ポイントの 3 である、「他のモードや調性を示唆するコードは扱いに気を付ける」で言うと、G7 と CM7 は C キー的な響きになりやすいのでそれに該当します。

Bm7(♭5)の方は、ポイント 4 の「モードでは Xm7(♭5)は使用を避ける」に該当するので除外しましょう。

となると、ポイント 5 の「そのモードの特性音を含み、かつトニックに近いコード」としては、「Em7」が、「最もトニックである Dm7 への解決を促すコード」になりますね。

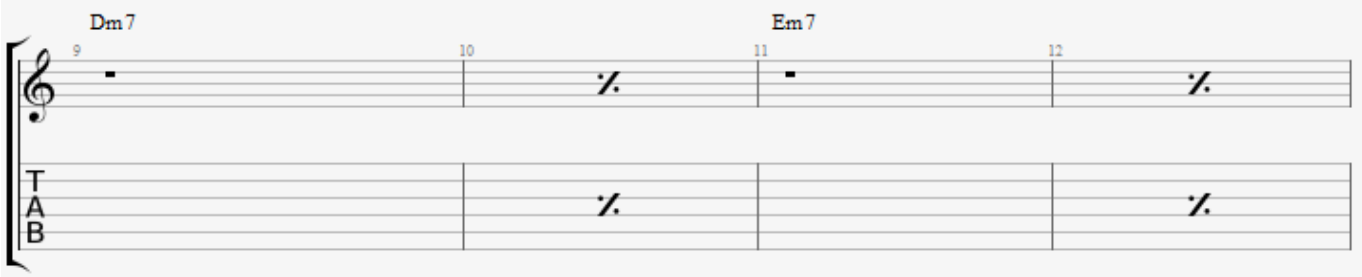
これらを踏まえた上で、ポイント 6 の「隣り合ったコードへの進行」をメインに考えていくと、最もシンプルな D ドリアンの進行としては、以下の様なものを作ることが出来ます。

譜例 1

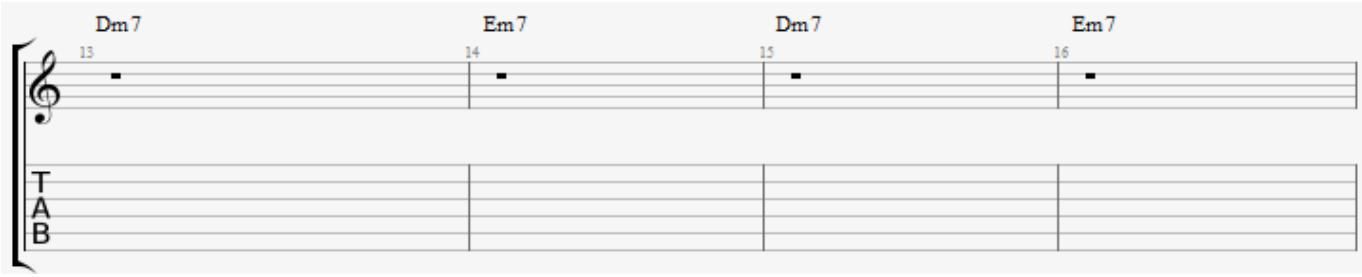


Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

譜例 2



譜例 3



後は他にも、「Xm7 一発」の進行がシンプルなものとして挙げられますね。

4 和音でのドリアン的な進行は他にも作ることが出来ますが、先にリディアンの時と同じ様に、3 和音の方も見ておきましょうか。

先ほどのダイアトニックコード群を 3 和音にするとこの様になりますね。

※C キーのダイアトニックコードを D ドリアンの観点で見る

Ⅰ、Dm
Ⅱ、Em
♭Ⅲ、F
Ⅳ、G
Ⅴ、Am
Ⅵ、Bm(♭5)
♭Ⅶ、C

ここから、Bm(♭5)は除外するとして、Em は相変わらず「特性音(B 音)を含み、トニック(Dm)に近い」ので、解決を促すコードして存在。

G コードは、特性音を含み、7 度が抜けたのでトライトーンが形成されず、調性音楽的なトニック(ここでは C)への解決感が薄れているので、G7 よりは使いやすくなりました。

C コードも、7 度が抜けたことによって、C キーのトニックとしての響きが薄れているので、こちらも CM7 よりは使いやすくなった、と。

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

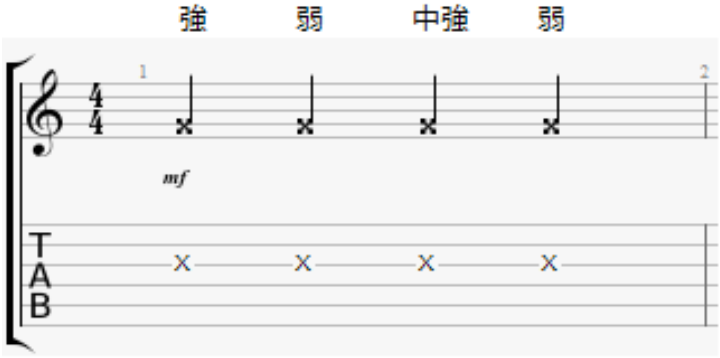
Am(Am7)と F(FM7)は、そのコードへのドミナント・モーションを作ったり、使いすぎ(長く鳴らしすぎ)たりしなければ、そこまでドリアンから離れる事もないので、ほぼ問題なし、という感じですね。

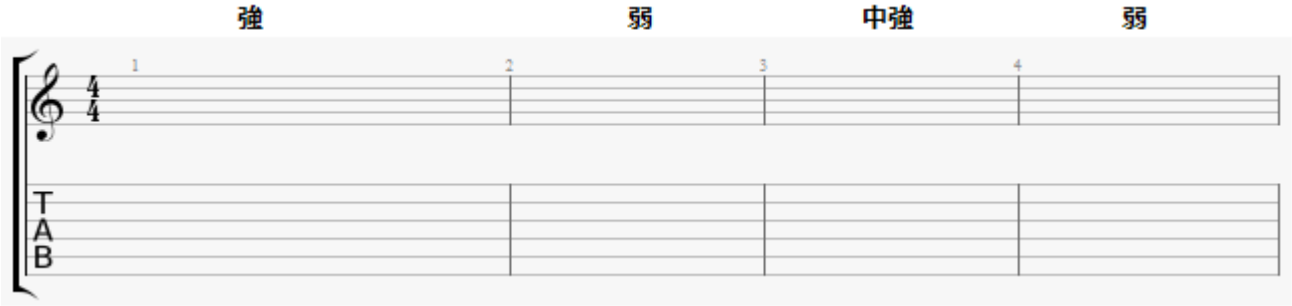
ここまでの話をまとめて、ドリアンの進行として使いやすいコードを順番に並べると、大まかには以下の様になります。

1、Dm(tonic)、Dm7(tonic)
2、Em(IIm)、Em7(IIm7)
3、G(IV)
4、F(♭III)、FM7(♭IIIM7)、Am(V7)、Am7(Vm7)、C(♭VII)
5、G7(IV7)、CM7(♭VIIM7)

この内、3 と 4 の 6 種のコードに関しては、一応、問題なく使えはしますが、音価に気を付けたり、ドミナント・モーション的な動きを示唆しない様にして、ドリアン以外の響きを出さない様にする必要がありますね。

後は、リディアンの時にもお話しした、「拍と小節の強弱の関係性」を意識しながらコードを配置していくと、ドリアンの進行を作ることが出来ます。





実際の所、何かしらのモードの状態を維持したい場合、コード進行の配置パターンはある程度限られてくるので、字面から受ける印象ほど、沢山の種類があるわけではありません。(※“根本的な部分では”ですが。やろうと思えばバリエーションは作れます)

これらの基本を踏まえた上で、自分なりにドリアンの進行を作ってみましょう。

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

繰り返しになりますが、大元の構造はリディアンの時と同じなので、そちらでやった事も参考にしてみて下さい。

それでは、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved